

夕張の宿

小山清

青空文庫

北海道の夕張炭坑に、弥生寮やよいりようという炭坑夫の合宿がある。

ある日、寮生の一人で坑内雑夫をしている順吉というのが、痔ぢの手術をするために炭坑病院に入院した。順吉にはまえから痔の氣があつたのだが、坑内で働いているうちに悪化したのである。附添いには寮の掃除婦をしているおすぎという寡婦やもめが附いていった。おすぎの夫は、坑内の人車捲じんしやまきの係りをしていたのだが、仕事しごとの歸りに、疾走してくる材料運搬車に跳ねられて頓死とんしした。一年まえのことである。殉職じゆんしよくという名目は成り立たず、会社からはわずかな見舞金しか貰えなかった。それに夫の芳三というのが、ふだんから会社側の氣受けがよくなかつたのである。芳三は

元来掘進夫で、仕事はよくやったが気性の荒い男であつた。現場で係員と喧嘩して傷を負わせたことがある。起訴されて執行猶予になつた。会社の方はべつに臍首にはならなかつたが職場を変更されて、採炭には直接関係のない坑外の人車捲きの係りに廻された。芳三のような男にとつてはとろくさい仕事であつたが、それでも無難に勤めていたのである。夫婦の間にはトシという娘があつた。その不慮の死の際、芳三は三十二であつた。おすぎは二十八、トシは二つであつた。芳三の死後間もなく、おすぎはトシを連れて弥生寮に掃除婦として住み込んで、ひとまず身の振り方をつけた。生前芳三とわりに親しくしていた寮長からその話が出たのである。

二月のはじめであつた。おすぎはトシを背負つて身のまわりのものを入れた風呂敷包をさげて寮を出た。患者の順吉は二、三日まえに既に入院しているのである。寮長から附添いの話があつたとき、おすぎは二つ返事で承知した。トシを寮に預けていくというわけには行かないが、また三つになるトシはそう手の焼ける子でもない。寮の炊事には若い娘がいくたりかいたが、それよりもおすぎが行く方が穩当のような気がした。弥生寮のある福住三区というところは山の中腹に当る。夕張は高原地帯なのである。おすぎは徒歩で山を下りようとして、ふと思ひ直した。履いているゴム長は底が減りすぎていて、雪の坂道を下るのは危い気がした。少し廻り道にはなるが、人車を利用した方が無事である。溜り場

には三四人の人が人車の下りてくるのを待っていた。おすぎもそこに佇たたずんだ。

そこはある寮の裏手に当っていて、ゴミ捨場の上の空間を、鴉からすが風のまにまに気持よさそうに舞っていた。

「ああちゃん、カラス。」

背なかでトシが云いった。かえりみてうなずいてやるとトシは嬉しそうににこにこした。

夕張は鴉の多いところである。雪景のあちこちに、まるで一片の木炭のようなやつが、決して人とは視線を交えず、きよろきよろとぬからぬかおをしているのをよく見かける。鴉のことでは芳三の思い出がある。こんどの戦争で支那大陸に行った芳三は、鴉

を生け捕って食った経験を話して、面白みみずくか本気かわからなかったが、当時住んでいた長屋の窓下に蚯蚓えを餌にして仕掛けをして鴉の寄るのを窺ったりしたことがある。もちろん鴉は芳三の網にかかりはしなかったが。芳三にはそんな面白いところもあった。間もなく、車輪の音を響かせて人車が下りてきた。混みあう時刻ではないので、乗っている人はいくたりもいなかった。係りの年寄りは当時の芳三の同僚である。おすぎを見かけると声をかけた。

「町へいくのかい？」

「病院へいくの。」

「トシ坊が悪いのか？」

「いいえ。寮の人が入院したんでお手伝いにいくの。」

「そうか。病人の介抱か。」

年寄りそれは御苦労なこったという顔をしてうなずいて、その節ふしくれだ榑立った指さきで、もとの同僚の遺児いじの頬を不憫そうに撫でた。トシは人見知りをしない子で、すぐあいそ笑いをした。

炭坑病院は町の入口のところにある。三棟むねから成る二階建の建物で、順吉の病室は第二病棟の階下の五号室であつた。順吉はとばくちの寝台の上にシャツにズボンの恰好で仰向けになつていたが、入ってきたおすぎを見ると、起きなおつた。

「どうもすみません。いま寮から電話がかかつてきて、あんたが来てくれるって、知らせてくれた。」

「手術はまだなの？」

「今晚なんです。」

おすぎは背なかからトシを下した。大きな部屋で、ふたがわに二十ばかり寝台が並んでいて、みんなふさがっていた。それぞれ附添いがついていたが、殆んどが長屋の人たちのようであつた。外科は毎日のように入院患者がある。坑内で怪我人が出ない日はないのだから。順吉は向いの窓際に並んでいる寝台の一つを指さして、

「あの人がすぐ退院するから、あとであそこへ引越しましょう。」
見ると、その人はもう退院の身支度みじたくをすました様子で寝台に腰をかけていた。若い元気そうな人である。準備の先山さきやまをしている

る人で、蒸気で顔を吹かれたのだそうだが、すっかりなおつてきれいな顔をしていた。傍らでおかみさんらしい人が風呂敷包をこしらえていた。その隣りの寝台には、瘦せこけた不精髯ぶしょうひげを生やした五十がらみの親爺おやじがいて、息子らしい若者が世話をしていた。おすぎは若者が洩瓶しゅびんをさげて部屋を出て行く姿をなんとなく目にとめた。ほかは附添いはみな女なので、その若者の姿はなにか神妙に見えた。

「こんどはどうもすみません。とんだお世話になりますね。」
と順吉は改まって云った。

「いいえ。気がねをしないで、なんでも遠慮なく云いつけて下さいね。」

「ありがとう。」順吉は気の毒そうに笑いながら、「それでも、おすぎさんはたつしやだなあ。」

「ええ。おかげさまであたしもこの子も丈夫ですわ。」

トシはふしぎそうに病室の中を見廻していたが、順吉の顔を見て、にこにこしながら、

「ああちゃん、ああちゃん。」と呼びかけた。

「まあ。この子は誰を見ても、ああちゃんの一点張りなんです。おじちゃんですよ。おじちゃんと云ってごらん。」

順吉はトシを抱きとって、

「トシ坊は愛あい嬌きようものだね。いくつ？　そうお、三つ。トシ坊

はきょうからおじちゃんと、病院でねんねするんだよ。いい子だ

から、泣かないね。」

そう云いながら、順吉はトシの頬に顔を寄せた。順吉はおあいそをしているのではない。トシの幼さに思わず心をそそられたのである。そういう順吉の顔を、おすぎはめずらしそうに見た。

順吉は寮ではおとなしい男で通っている。寮生は殆んどが内地から来た者である。東京者もいくたりかいる。順吉もその一人である。年齢は三十五だが、年齢よりはすこしふけて見える。夕張に来た二年目になるが、最初の冬は寒さと労働の烈しさから軀をこわして、二月ばかり病院通いをしていたこともある。おすぎが寮の掃除をしているとき順吉が仕事から帰ってくることもある。「御苦労さま。」と声をかけると、きまつて「只今。」と堅い返事を

するが、それがひどく内気な感じであつた。炊事などで女たちの間に寮生の噂が出ることがあるが、順吉のことが話題に上つたことはない。どちらかと云えば、無愛想な堅苦しい人ということになつていた。

窓際の人が退院したので、順吉たちはそのあとに移つた。その人はおかみさんと二人で病室の一人一人に挨拶して順吉たちにも「御大事に。」という言葉をかけていった。おかみさんは順吉たちを夫婦のように思い違ひをした様子でトシに飴玉あめだまをくれたりした。おすぎはまた、まだ所帯やつれの見えない子供じみたところのあるおかみさんの容子ようすを見て、はきはきした気さくそうな人だと思ひ、短い挨拶の間に、女同士の親しみをふと感じた。芳三

に先立たれて一年になるが、おすぎは昨今、町などで夫婦連れらしい男女の姿を見かけると、それに気を惹かれている自分に気づくようになっていた。芳三の死が思いがけないものであっただけに、あきらめきれないものが残っていて、氣持のまぎらしないことがある。おすぎが寡婦やもめの身の上を強く意識するのは、そういうときであつた。

看護婦の見習が二人連れ立つて入ってきて、順吉の寝台のわきに立った。見ると一人は手に剃刀かみそりとちり紙を持っている。彼女は順吉に命じて輕業かるわざのような恰好をさせて、もの慣れた顔つきで器用に剃刀をあつかつて毛を剃りそおとした。用事をすまずと、彼女たちはまた連れ立つて部屋を出て行つた。澄ましたものであ

った。おすぎは目をそらしていたが、なんとなく感心した。十四五ぐらいの幼さで、まだ一人前に成熟していない、蚊かばそ細い肢体をしている見習に、ひどく職業的なものを感じたのである。

「ひどい恰好をさせやがる。」

順吉は照れて苦笑いをした。

おすぎはまたトシを背負って、町へ出かけて、差当って必要なもの、洗面器、しゅびん 洩瓶、ほうき 箒、塵ちりとりなどを買ってきた。おすぎが渡した釣銭を財布に仕舞う際に、順吉はふと思い出したように、財布から小さい紙包を取り出してひろげた。中の品物は観音さまのお守りだが、二つに割れている。一年前、東京を立てて北海道へ来る日に、順吉はいったん指定の集合場所へ行ったが、汽車の

発車時間まで暇があつたので浅草の観音さまにお参りした。そのときこのお守りを買った。こないだふと取り出して見たら割れていたのである。こういう現象は巷間こうかんではその持主に観音さまの加護の手がはたらいたということになっている。

「ごらんなさい。観音さまのお守りが割れちゃった。」

おすぎは無言で手に取つて、ちよつと感慨深げに見守つてから順吉に返した。

日が暮れて燈火が点ついてから間もなく、順吉の手術があつた。おすぎは順吉が手術室に運ばれた留守の間に、寝台のまわりを片づけて掃除をした。この病室は窓際にスチームが取りつけてあつて暖かで汗ばむほどである。窓硝子ガラス越しに、遠景の山の中腹に鴉

の群れているのが、暮色の中に黒々と見える。窓の外は病院の
庭で、そこに外郭がいかくを煉瓦れんがで囲った手術室がある。手術室には煌こ
々うこうと燈火が点いている。中では順吉の手術が行われているわけ
である。薄闇の中で手術室の窓はいかにも明るい。おすぎはトシ
に乳を銜くませながら、最前順吉が観音さまのお守りを見せてくれ
たときのことを思い浮かべた。あのときおすぎは吐胸とむねをつかれる
ような感じをうけた。はるばると遠い他国に來た人の身の上をか
りそめに思うことが出来なかつたのである。今あのときの氣持を
静かに反芻はんすうしていると、自分とトシの身の上が改めてかえりみ
られるような氣もしてくるのであつた。

順吉の手術の結果は順調であつた。痛いものらしいのだが、順

吉はそう痛みを訴えるでもなかった。

「痛みますか？」と訊くと、柔らいだ表情で、「ええ、すこし。」と答えた。

その後四五日は重湯ばかり啜すすっていたので、腹は空いたらしかつた。そのつど賄まかないから届けてくる食事を見るたびに、順吉は不服そうな顔つきをした。おすぎは気の毒な気がしたが、医師の許可がないので、なにかをつくってやるといふわけにも行かなかった。順吉はおすぎが町で買ってきた飴玉をしゃぶってわずかに気をまぎらしていた。

「もうすこしの辛抱よ。なんでも上れるようになったら順さんのお好きなものをつくってあげますわ。」

と云うと、順吉は照れたような表情をした。順吉はよくその浅黒い顔を赤くした。現場の先山が見舞いにきて夕張も悪くないだべ、こつちで所帯を持ったらどうかと云ったときにも。また、寮長が味噌を持ってきたてしっかり養生してまた働いてくれと云ったときにも。夕張に來た最初の冬に軀を悪くして仕事を休んでいた頃、風呂で寮長と一緒にになったとき内地へ帰れと云われて途方に暮れたことがある。病気になったからと云って帰れる身の上ならば、はじめから北海道くんだりまでやって來はしない。あるときは心細い思いをした。ここで辛抱しんぼうしてみろなどと云われると、順吉の身としてはお世辞でも嬉しい。平素どちらかと云えば沈んで見える顔つきに、わだかまりのない明るい表情が浮かぶ。おす

ぎはそばにいて順吉を感じやすい人だと思った。

「北海道は寒くていやでしょ。」

「ええ。はじめの年は寒かったな。でもことは慣れたせいかな、それほど寒いとは思いませんよ。」

世の中はいやなことばかりではない。苦しいことのあとには楽しいことがある。諦める心は同時にまた期待する心である。順吉はそれを経験で知っていた。順吉がまだ十の年に母親に死別れて独りで世の中に投げ出されたとき以来、ていつた齡をとるにつれてまた境遇の変るたびごとにいわば肉体的な手応えていつたのように実感してきたのである。

母一人子一人の身の上であった。順吉には父親の記憶は少しも

ない。物心がついた頃には母親と自分だけしかいなかった。母親からは父親は順吉がおさなご孩児の頃に死んだように聞かされていた。けれども順吉は母親に連れられて、父親の墓参りなどしたことは一度もなかった。順吉の姓は母親の姓なのである。順吉が自分の出生のこと身の上のことを了解したのは、母親の死後だ**いぶ立つ**てからであつた。十八の年には洗張屋に奉公していたが、兄分に当るのが、寝物語に順吉の話を聞いて、「なんだ、それじゃ、お前、父てなし児じゃねえか。」と云つた。順吉はいきなり顔をはたかれたような気がした。よくはわからなかつたが、単に父親が死んでいない者のことを云うのとは違ふ、もつと恥ずかしい身の上のことだという感じが、そのとき強く頭に染み込んだ。齡にして

はまたそういう境遇の者としては、少し疎^{うと}すぎると人は云うであらうが、順吉は生れつきそんな子供であつた。兄分の男は「可哀そうだなあ。」と吐き出すように云つて、順吉の顔を見据^{みす}えながら「おやじのことを思うかい？」と訊いた。順吉はかぶりをふつた。父親のことなど思つたこともない。だいぶ立つて頭の中に事実がはつきり映るようになったとき、順吉にはただ母親が不憫に思われた。母親は震災のときに死んだ。家は吉原遊廓のはずれの俗に水道尻という処にあつて、母親はある貸座敷の新造^{しんぞう}をしていたのだが、つとめ先のその家が崩壊した際に逃げおくれたのである。母親の死と共に順吉には家庭が失われた。それから他人の飯を食うようになった。二十余年の歳月が過ぎた。いろんな人の

世話になり、いろんな職業に就いてみたが、みんなものにならなかった。^{すこしく}双六で云えば、いつも振り出しのへんでまごついてい
る感じである。いい齡をしてわが身一つを養いかねているあんな
いであるが、結局は自分に辛抱氣が足りなかったのだと思ってい
る。これまで決していい目は見て来なかったが、順吉は頑^{かたくな}な男で
はなかった。頼りない身の上であつたから、それだけにまた人の
親切は身にしみた。戦後順吉はある五十女の担ぎ屋の手伝いをし
ていたが、その慾の皮の突張つた女から飼ひ殺しにされているよ
うな感じで、毎日寿命の縮む思いをした。順吉はときどき道を歩
きながらズボンの上から股のあたりをさすつてみたりした。なん
だか少しずつ肉が削^そげていくような氣がしたのである。ある日、

順吉はふとその気になつて職業紹介所へ行つて、炭坑夫の募集に応じた。一生のうちに北海道へ来るようなことがあるうとは夢にも思つていなかったが、そういうはめになつたのである。

夕張にきてしばらくは殺風景な、ただ寒いばかりの処だと思つた。いまは、住めば都だと思つている。

「順さんはいずれまた東京へ歸るんでしょ。」

と、おすぎが云つた。トシに昼寝をさせて、洗濯した順吉のシヤツのつくろいをしながら。順吉は寝台に腹^{はらば}這いになって、見舞いにきた寮生が置いていった雑誌をひろげていたが、

「ええ。こつちへ來るときはそのつもりだったんだけど。二年ばかり働いてすこしは残して歸ろうなんて思つていたんだけど。」

「それですこしは残りましたか？」

「いいえ、さっぱり。この分じやいつ帰れるかわからない。」

「それでも東京には誰方どなたか待っている人がいるんじゃないんですか。順さんがしっかり稼いで帰ってくるのを。」

「冗談じゃない。おすぎさんも口がうまいな。そんな人がいれば、なにも北海道までくるもんか。」

「隠しても駄目ですよ。それじゃ順さんはこれまでずっとお独りだったの？ お家を持ったことはないんですか？」

「ええ。いい齢をして他人の台所をうろついてきたんですよ。」

母親に死別してから、順吉は折にふれてわが家というものを想像したが、それは幼い身で独り世の中に投げ出されたときから変

ることなく、いつもきまつて母親と二人で暮す生活のことばかりが思われた。死んだ母親のいる家、順吉がゆつくり手足を伸すことの出来る家。北海道行はそれまで東京の外へ出たことのなかった順吉にとっては初めてする遠い旅であつたが、途中汽車が青森の郊外に入つて、雪の降る中に次第に数を増してくる燈火を寒さに震えながら眺めたときにも、また北海道に渡つてから、寂しい海岸べりを長時間も、そういうせきりよう寂寥の中に母親と二人で暮す生活のことが思われた。順吉の念頭に絶えず母親のことがあるというわけではなかった。心の底に畳まれているのである。

「おすぎさんは内地へ行つたことはないの？」

「ええ。まだいちども。さつぱろ札幌やはこだて函館さえ数えるほどしか行つ

たことはないんですの。」

「おすぎさんはずっと夕張ですか？」

「いいえ、あたしは岩見沢いわみざわですの。」

おすぎも肉親の縁には薄い身の上であつた。父親は岩見沢の警察の老朽ろうきゆうの巡査であつたが、おすぎが二十三の年に脳溢血のういつけつで死んだ。母親はその二年前に死んでいた。おすぎは一時叔父の許に身を寄せて、叔父が町の映画館の中に出している売店の売子をしていた。その頃芳三と知りあつた。芳三は帰還したばかりで町の運送屋に勤めてオート三輪車の運転手をしていた。きつかけは始終映画を見にきていた芳三がある日おすぎに話しかけたのである。間もなくおすぎは芳三に唆そされて叔父の家を出た。ひとつ

は同年輩の従姉妹との間がうまく行かなくて叔父の家も居辛かつたのである。芳三に連れられて、砂川、追分と近間ちかまの町を転々としてそして夕張にきた。岩見沢には芳三の父親がいたが、しかし今日、芳三に死なれたからと云って、頼って行く気にはなれなかった。

「でも順さんもよくこんな炭坑なんかに来る気になりましたわね。」

「だってどうにもしようがなかったんですよ。あちこちに不義理だらけで。」

と順吉は吐き出すように云った。自分の過去に対して疚やましさといまいましさを同時に感ずることがある。そういうとき順吉は自

分をひどく人と変った者のように思い込んだりする。自分にはなにか欠けているものがあるのじゃないかしら。人と人とを結ぶ心の鞆じんたい帯のようなものが。自分には小さいときから親がいなかったからなどと思う。

「そうですわ。誰も好きで不義理をしたいわけじゃないですもの。仕方のないことがありますわ。」

おすぎは自分の心に問うようにうなずいて云った。こちらにも言い分があるような気はするものの、世話になった叔父の家を出たときのことを思うと、うしろめたい気にもなるのであった。芳三はいつも大きなことを云って輝かしい未来を描いて見せた。おすぎはそれを芳三の云うとおりに信じたわけではなかった。芳三

はおすぎを欺いたわけではなかつたし、おすぎもまた欺かれていたわけではなかつた。あざむ

順吉はスチームのわきに片寄せた夜具の上にすやすや寢息を立てているトシを見て、

「トシ坊はいまがいちばん可愛いときだな。あんたによく似ている。色の白いところや額の感じなど。」

「ええ。みなさんがそう云いますわ。」

「おすぎさんはすこしおでこじゃないんですか。貶けなして云っているわけじゃありませんよ。」

「褒めているわけでもないんですよ。お前は額が高くて鼻が低くてまるでおかめのようなだって、おつかさんからよく云われました

わ。学校へ行っていた頃には、友達からでこでこつて云われたものですわ。」

順吉はふと思い出したように笑いながら、

「おすぎさん。ちよつとここを触つてごらんさい。」

そう云つて、寝台からその短く刈つた頭を伸して、おすぎの指を触れさせて、

「いやにでこぼこしているでしょ。こういうのをほうねんあたま法然頭ぽうねんあたまつて云うんだそうだ。子供の頃、お袋から聞いたんですが、思い出したりすると可笑しくて。」

「でもそこからわからないですよ。」

おすぎはわからないままに氣の毒そうに云つた。

「いいえ。お袋の話だと縁起がいいらしいんだけど。」

「あら、それじゃ結構じゃありませんか。」

そう云つてから、おすぎはなんとつかず可笑しくなつた。順吉も笑いながら、

「結構でもないがなあ。」

と云つたが、なにか楽しそうな眼つきをした。

順吉には母親に ひざまくら 膝枕をして耳の掃除をしてもらった遠い記

憶がある。母親は順吉の小さい凸凹のある頭をなでて、「お前は法然頭だよ。こういう恰好の頭の人出世するんだってさ。順吉はいまにえらい人になるかも知れないよ。」と云つたりした。順吉に話して聞かすというよりは、それを口にするのが母親にとつ

て如何にも楽しいようであつた。順吉はくすぐったい氣持がした。こんなのがお袋の味というものであろうか。母親が後家の身を立て通してきたのも、順吉という者があつたればこそである。いくらか世間の塩をなめてきた心でふりかえてみると、母親のつらい立場が順吉にもわかる氣がするのであつた。

「おすぎさんもたいへんだなあ。」

順吉はいまさらのように、おすぎ親子の境遇を思いやつた。

順吉はおすぎの夫の芳三を知っていた。順吉が夕張にきた頃、ちようど芳三は人車捲きの係りをしていた。奇禍に遭う二月ばかりまえのことである。順吉は仕事のかえりには、徒歩で山を登らずにそのつど人車の世話になっていたから、ときどき芳三を見か

けていた。芳三は坑夫たちの間ではこわもてしているようであった。骨太の軀の大きい男で、額の感じなど如何にも喧嘩好きらしい気性を見せていた。口のきき方もひどく乱暴であった。

おすぎが寮にきてしばらくしてから、あれが死んだ芳三の女房だと聞かされたとき、順吉は意外な気がした。芳三のような一見粗暴な男の女房としては、卑屈なもつとおどおどした女を想像していたからである。「芳三は女房に惚^ほれていたよ。」と云う寮長の話を聞いたとき、なるほどそうかも知れぬと思った。順吉が仕事から帰ってきたときなど、トシを背負ったおすぎが寮の事務所の窓硝子を拭いていたり、また土間を掃除していたりすることがある。順吉がそばを通ると「ご苦労さま。」と声をかけたり、と

きには「順さんはいま一番方ですか。」などと云ったりする。人柄というものはおかしなものでこんななんでもない挨拶が、云う人によつてはひどく親身に聞かれるものである。おすぎにはそんなところがあつた、仕事をしながらよく流行歌をうたっているが、こんなのは働きものによく見かけることである。炊事の娘たちの間でも、おすぎはいいおばさんであつた。

「順さんはいい身分だね。」

見舞いにきてくれた寮生や現場の同僚たちが、順吉とおすぎをかえりみて口々に云う。ただ恢復かいふくを待つばかりの病人ははた目には気楽そうに見えるのであろう。渡る世間に鬼はいないと云うが、順吉はいま自分がひどく果報者かほうもののような気がしている。人

の住んでいるところには人と一緒に親切も住んでいる。そういう思いが順吉の心の中に一つの言葉になって浮かんできた。

「おすぎさんはいいなあ。」

順吉はおすぎと話しながら、ときどきおすぎの顔を見つめている自分に気づくようになっていた。

順吉の隣りの寝台にいる親爺さんは長屋の人ではなくて、やはりほかの寮にいる人であつた。息子かと思われた若者も同じ寮生で、手が足りないため附添いを頼まれたものらしかった。盲腸の手術をしたのだが、経過ははかばかしくないようであつた。痩せこけて不精髯を生やしているのでひどくふけて見えたが、それほどどの齡でもなかった。やはり東京者で深川に妻子を残してきたと

いう。木場きばにいたこともあるとかで、坑内では支柱夫をしているようであつた。この人はときどきひどく癩かんしゃく癩を起した。若者が病室にいないときにわざとのように、

「附添いに来ているんだか遊びに来ているんだかわかりやあしねえ。」

と、大声で聞えよがしに云つては、寝台から不自由な軀を起して、便器の前に屈み込んだりした。ときには若者に面と向つて、
「あんた厭なら寮へ歸つて、誰かほかの人を代りに寄こして下さい。」

と、つけつけ云うこともある。たとえどんなに行届かないにしても、世話をしてもらっている人にひどいことを云うと思われるの

だが、そんなに云われても、若者は腹を立てるでもなく云い返しもしなかった。この若者は病院に携帯用の蓄音器を持ち込んでいて、あちこちの病室に持参してはかけているようであつた。おすぎも乾燥室で若者が同室の附添いの娘と二人で、蓄音器をかけているのを見かけたこともある。親爺さんが怒るのも無理のないところもあるし、若者としてはまたいまの境遇が気に入っているよ
うなところもあつた。坑内に入つて真黒になるよりは、この方がまんざらでもないのかも知れなかつた。順吉は親爺さんがあまり口汚く云うので、聞き辛い氣もしたし若者が氣の毒にも思えたが、病室の人は誰もこの二人のことをことさら氣にするふうでもなかつた。おすぎも隣り同士のよしみで、なにかと親爺さんの面倒を

見たり、また若者にも親切に振舞っていた。おすぎの気軽なかわりのない様子を見ると、順吉は柔らいだ氣持をひきだされた。些細ささいなことが私たちを慰める。なぜなら些細なことが悲しみの種になるから。順吉はこれまでにこんな氣持の落着いたことはなかったような氣がしている。

隣りの親爺さんはふだんは謙遜けんそんな人で、順吉たちと口をきくときは人が変わったように丁寧であつた。同じ東京生れなので、昔の東京の思い出話をはじめると、順吉との間には話が尽きなかつた。健康保険から入院の見舞金をもらつたときには、親爺さんはひどく恐縮した。おすぎに頼んで早速東京の妻子の許に送金した。「齡はとりたくないものですね。氣ばかりで軀がいうことをきき

ません。そろそろ東京へ帰ろうかと思っているんです。」

と、親爺さんは云った。

ある晩、病院の隣りの芝居小屋にめずらしく地方廻りの歌舞伎芝居がかかった。順吉はおすぎに気晴らしに行つてくるようにすすめた。

「あたしは田舎者ですから。それにもつたいないですわ。」

と、おすぎは云った。おすぎは若者を誘つたが、若者は映画を見に行くと言つた。おすぎはトシを連れて出かけた。重しげの井いの子別れをやっていた。女の子の子役がやった馬追いの三吉におすぎは感心した。その子は自分の役が済んでからは、お河童かっぱがみ髪かみの姿になつて、花道のわきに行儀よく坐つて芝居を見ていた。おそら

く誰か一座の役者の子供なのであらうと思ひながら、おすぎはときどき舞台よりもその子の方に氣をとられた。

歸ると、若者はまだ歸つてきていなかった。

「あの芝居は泣かせるでしょう。」

と、親爺さんが云つた。おすぎは買つてきた林檎りんごを剥むいてすすめた。順吉はトシを抱いて、

「トシ坊はお芝居を見てきてよかったね。おとなしく見ていた？」

「ええ、お利口さんでしたね。きれいなお姫さまがいたでしょ。」

おすぎはトシの顔を見つめている順吉の眼差しを見てこの人は子供が好きらしいと思つた。眼は心の窓と云うが、その人の心の奥が覗かれるような氣のすることがあるものである。死んだ芳三

も子供好きであつた。芳三は仕事から帰つてきてから、よく町のマージャンや麻雀屋へ出かけた。金を賭けてやるのである。おすぎがトシを連れて風呂の帰りに麻雀屋の前を通りかかつて覗くことがあると、「なんだ、迎えに来たのか？　すぐ終るから待つてろ。」

と、怒鳴る^{どな}ように云つて、やがて出てくる。歩き出してから、「どうでした？」

と訊くと、

「負けた。」

と、云つて闊達に笑う。おすぎにおぶさっているトシの顔を覗き込んで、指でかるくその頬をはじいたりする。ふいに道ばたに屈み込むので、どうしたのかと思うと、そこに咲いている名もな

い花を摘んでトシの掌に握らせるのである。芳三が負けた結果は直接生活にひびいてくる。おすぎは困ったと思いながら、それでいて芳三の顔を見てみると、何か心丈夫な気がしてくるのであった。見かけはただ荒つぽいばかりの人であつたが、そのやさしい実意をおすぎはいちども疑つたことはなかつた。家計は苦しかつたが、おすぎには楽しい生活であつた。順吉を見てみると、まろきり違つた人柄のようであつてどこか芳三に似てるようなところがある。そう云えば、芳三があけすけであつたように順吉にも自分の過去を飾るようなところがない。内地から来た人の中にはどうかすると自分の来歴を修飾して話す人があるが、順吉にはそんなところは少しもなかつた。世の中というすり鉢ばちの底を這い廻つて

きた順吉は、ねっからうだつがあがらなかったが、それだけにまた虚栄というものにわずらわされない暮しをしてきた。それはおすぎの場合も同じである。しばらくいつしよに暮してみると、順吉はそう堅苦しい人でもない。

おすぎは病院へ来た最初の日、順吉が観音さまのお守りを見せてくれたときのことを、このときもまたふと思い浮かべた。

「山村さんが明日退院するそうですよ。」

「ああ、あの六号室の粘土ねんどやさんか。」

「ええ。おもしろい人ですわね。あたしがあの人の死んだおかみさんに似ているんですって。」

やがて若者が帰ってきた。しばらくしてみんな寝仕度をした。

青空文庫情報

底本：「落穂拾い・犬の生活」ちくま文庫、筑摩書房

2013（平成25）年3月10日第1刷発行

底本の親本：「小山清全集」筑摩書房

1999（平成11）年11月10日発行

初出：「新潮 第四十九卷第四号」新潮社

1952（昭和27）年4月1日発行

入力：時雨

校正：酒井裕二

2017年8月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夕張の宿

小山清

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>